

含光君の恋文

しばた三歳

目次

サンプル

【第一章】

三月十四日 晴天

205

【第二章】

三月十四日 夕餉の記録 静室にて

248

【第三章】

三月十六日 晴天 蓮花塙にて

508

【第四章】

.....

87

【第五章】

三月十八日 時雨のち晴れ 雲夢の宿にて

132

【第六章】

三月二十日 晴れ

157

番外編 【江家の晚餐】
三月十六日 夕餉 蓮花塙にて

172

番外編 【六甕の獣】

194

サンプル

【第一章】

「またまた景儀ったら。……えっ、冗談だろ？」

「ごめん、本当なんだ……魏先輩」

信じられない話を聞くと、人はなぜ笑ってしまいたくなるのだろうか。

思わず吹き出しそうになった魏無羨だったが、明朗快活な藍景儀がうなだれる様子に、これは冗談ではなさそうだと態度を改めた。

いわく——仙督・含光君が、言葉を失った。

もともと無口な含光君だが、自分の意志で話さないのと、話したくても話せないのとではまったく意味が異なる。そもそも仙師界最強と謳われる藍忘機が、簡単にこのような術を受けるはずもない。——それが、他者から放たれた術であつたなら。

事の次第はこうだ。気の触れた男が一人、雲深不知処の山門に現れ、含光君を呼べと剣を振り回しはじめた。近くにいた藍景儀ら数人が駆け付けると、男は口から涎をたらし、罵詈雑言をわめきながら空を斬っていた。

「来たか姑蘇藍氏！ 見た目は白いが、腹の中はまっ黒だなア？ 知っているぞ、お前たちは夷陵老祖を檻に入れ、昼夜となく拷問しているんだらう？」

「はあっ？ 魏先輩を、拷問……？」

あまりにも現状にそぐわない言葉に、藍景儀は一瞬言葉を失う。たしかに魏無羨は雲深不知処に身を寄せているが、それは含光君の知己としてだ。仙督自身がこの上なく丁重に——まるで深窓の令嬢に接するがごとく扱うため、子弟たちは目を白黒させながらも、彼を賓客だと理解していた。

「安心しろ、秘密は守ってやるから——その代わり、俺にも拷問させろ」

男は息を荒げ、血走った目で子弟らに笑いかける。

「夢にまで見るんだア……アイツをどう痛めつけるか。爪を剥ぐか、指をもぐか……ヒヒッ」
あんまりな言い草にカツとなった景儀が、

「だまれッ！ 妄言を吐くな！」

と怒鳴ったとき、さあっと子弟らが道をあけた。

（中略）

番外編 【六甕の獣】

口を吸い合いながら御剣し、白黒二人は空を蛇行しつつ、雲夢はずれの宿になだれ込んだ。

本来であれば、すぐに雲深不知処へ戻り、藍啓仁へ謝罪しに行かねばならない。藍忘機はほんの数刻のうちに、家規を六つ破った。身なりを整えず、執務を放棄し、無断で外出、下山せずに御剣、藍啓仁自慢の結果を歪め、そして今——唇を赤く腫らして、みだらな様子を周囲に晒している。

しかし藍忘機は思う。今は謝罪どころではない。自分の人生に、これほど切羽詰まり、他の全てがどうでも良いと思えるような僥倖が訪れようとは。

あまりにも乱れた含光君の外見を気にして、せめて髪だけでも撫でつけようと魏無羨が腕を伸ばしてくれたが、互いに口を吸い合うのに夢中になり——さらに幾度も避塵から足を踏み外した事で、宿に着く頃には、二人とも乱れきった外見になっていた。

顔に笑みをはり付けた宿主から軟膏を受け取った藍忘機は、客室に入るなり結界を張る。すぐに魏無羨の、吸いすぎてぼってりと赤く腫れた唇におしゃぶりついた。

「ん……」

待ちきれず、魏無羨もみずから口を開く。昨夜はじめて口づけを知り、ほんの先ほど口吸いを覚えたばかりの二人だったが、すでに互いの唾液に飢えていた。

魏無羨はかつて、仲間との猥談で「相性の良い女人の唾液は甘く感じ、体臭も快く感じる」と聞いた事がある。唾液が甘いかと本気かよと笑っていたが、（あれは真実なのかも知れない）とぼんやり思う。だって、こんなに——嘘みたい甘い。

体臭だって。いまだかつて、男の体臭なんてくさいとしか思わなかったのに、藍忘機の匂いはダメだった。今もこうして身を寄せ合いながら、その魅惑的な香りに頭がくらくらしている。

口を吸い合い、互いの体をまさぐっていた手が、徐々にきわどい部分へと向かう。特に藍忘機の手はわかりやすく、魏無羨の背中を撫でおろし、盛り上がった尻へと執着を見せていた。はじめはたどたどしく、次第に強く揉まれるうちに、魏無羨はくすくす笑いだす。

「藍にちゃん、ちよっと尻を揉みすぎじゃないか？ そんなに俺の尻は可愛いかな？」

「……うん」

耳を赤く染め、別人のように荒い息を吐きながら、藍忘機は素直に頷いた。

実際、魏無羨の尻はとても魅力的だった。細身なのにそこだけがふっくらと肉感的で、柳のようにしなやかな腰からの対比は藍忘機を魅了してやまない。これまでにいったい何度、そこ

を愛する想像をして来た事か。夢にまで見た部位を自由にいじれる興奮と、指を弾くこち良
い揉み心地に夢中になり、そこから手が離せなくなる。

「ふふっ」

魏無羨はご機嫌だった。尻を揉まれたところで大して気持ちよくも無い。だが、あの雅正の
手本たる含光君が自分の尻に執着しているという事実がたまらない。藍忘機の余裕の無さが愛
おしく、それがむしろ魏無羨に余裕をもたらしした。

「お前が尻なら、俺はこっち……」

ほんのり笑いながら、藍忘機の股間に手を伸ばす。御剣している最中、藍忘機は少し腰を引
いていた。その股間が充血している事には気付いていたが、さすがに空中で股間を探るのはど
うかと、ずっと触れるのを我慢していたのだ。

「魏っ、……っ！」

隠しようもなく隆起したそれに手を這わされ、藍忘機は息を呑む。

「おま、……ええっ？　ちよつと、……でかすぎじゃないか……？」

意気揚々と撫て始めたいたずらな手は、全体像を把握した途端にひるむ。

（なんだコレ、えっ？　嘘だろう？）

ひるむと同時に、おくおくと好奇心が湧いて来た。

「ちよつと見せて？」

言うや否や、藍忘機の前にしゃがみ込み、帯を解きにかかる。今日の藍忘機を裸に剥くのは簡単だ。なにしろ寝着の上に外衣を羽織っているだけなのだから。

抵抗も無くすると下衣を落とせば、お上品な外面からは想像もつかないような肉塊が姿を現す。びきびきと血管を這わせ、まさに怒張といった風情だ。

「でっか……！」

魏無羨は目を輝かせた。でかいのは男の誉れだ。単純にかっこいいと思う。

「いいなあ藍湛の！ めちゃくちゃでかいじゃないか！」

俺のだって小さくはないと思うけど、そう言いながら自分の帯を解きにかかる魏無羨を見て、藍忘機は興奮のあまり眩暈を覚えた。

（魏嬰が、わたしと睦み合うために、自分で衣を脱いでいる……っ）

はあはあと、さらに荒くなる吐息が恥ずかしい。

一方の魏無羨は、さらに大きく育った藍忘機の陰茎に気を取られ、脱ぎかけの手を途中で止めた。

「嘘だろ、まだ大きくなるのか……？」

再度その場にしゃがみ込み、無邪気にそれを眺めだす。雲夢でも大きさ比べをしたが、藍忘機のそれは群を抜く大きさで、美しい反りを見せている。まるで龍の角のようだ。

「こんなにかっこいいちんちん、俺見た事ないよ。さすがは含光君だ……」

(続 き は 紙 の 本 で お 楽 し み く だ さ い)

含光君の恋文

しばた 3 歳

.....

発行日 : 2022 年 7 月 2 日
発行者 : しばた 3 歳
連絡先 : shibata3sai@gmail.com
Twitter : <https://twitter.com/shibata3sai>



【Twitter】

.....

印刷会社 : 製本直送.com
表紙 : canva 作成
Pixiv 小説 ID : 17219724



【pixiv】

.....

※無断転載・複製・複写・web 上への掲載は禁止です。